

篠原型須恵器の分布について

伊野近富

1 はじめに

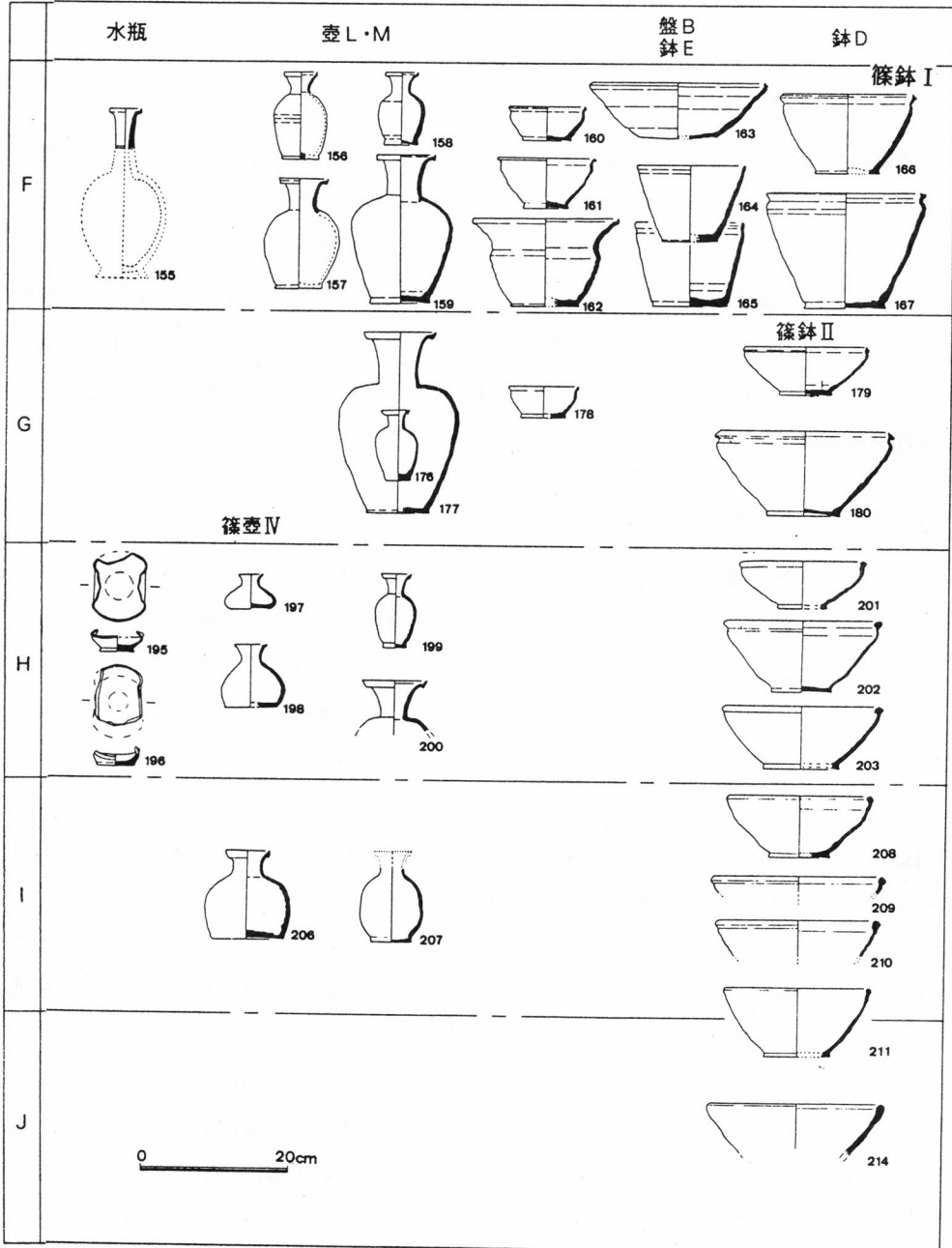
京都府亀岡市に所在する篠窯跡群は、特に平安京に供給した窯として有名である。須恵器を主体として生産したが、10世紀の一時期には緑釉陶器も生産しており、11世紀になると場所は川向うになるが、瓦を生産するなど、多岐に亘る窯業地であったことが知られている。本稿は、篠窯製品の広がりについて西日本を中心に調べたものである。製品は須恵器のみに限定した。この理由は、筆者が先に明らかにした篠独自の器形である篠原型須恵器については、報告書の掲載図でも充分検討できると判断したからである。それでは、まず篠原型須恵器を呈示し、その後分布の意味について述べたい。

2 篠原型須恵器について

篠独自の器形を篠原型と呼ぶが、特に壺L・Mと、鉢Dや篠鉢Ⅱと分類した一群が良好な判断材料である。第1図は筆者が先般発表した篠編年図¹のうち、本稿で必要な部分を抽出したものである。ここに呈示したF～J期は、おおよそ150年を5分割したもので、F期が9世紀後葉、G～I期が10世紀に相当し、J期が11世紀前葉に相当する。但し、実年代が判明しているのは、F期(884年が年代の1点)とH期(953年が年代の1点)、I期(973年が年代の1点)であるので、この年代で推定すると、G期はその始まりが9世紀末まで遡り、H期は10世紀の第2四半期が中心となり、I期は10世紀の第3四半期が中心となり、J期はその始まりが10世紀末まで遡ると考えてもよい。

さて、器形の変遷をみてみよう。F期の壺L・Mの口縁端部は上下に肥厚されたものであるが、前段階より退化してシャープさを失っている。鉢Dは口縁部を「く」の字に屈曲させたもので、内側をつまみ出している。前段階での系譜をひくやや背高のもの(167)と、次段階の祖型である背低のもの(166)の2種が混在しており、特に後者を篠鉢Ⅰと分類したい。G期の壺L・Mの口縁部は外反する。鉢は前代よりさらに口縁部が屈曲し、端部の断面は「T」の字状となる。これを篠鉢Ⅱと分類したい。H期の壺L・Mの口縁部は外反し、端部のつまみ出し状の突起は退化する。ここで新たに篠壺Ⅳが出現する。これは船どっくりのように体部が扁平なものである。篠鉢Ⅱの口縁部は丸く肥厚する。I期の篠壺Ⅳの

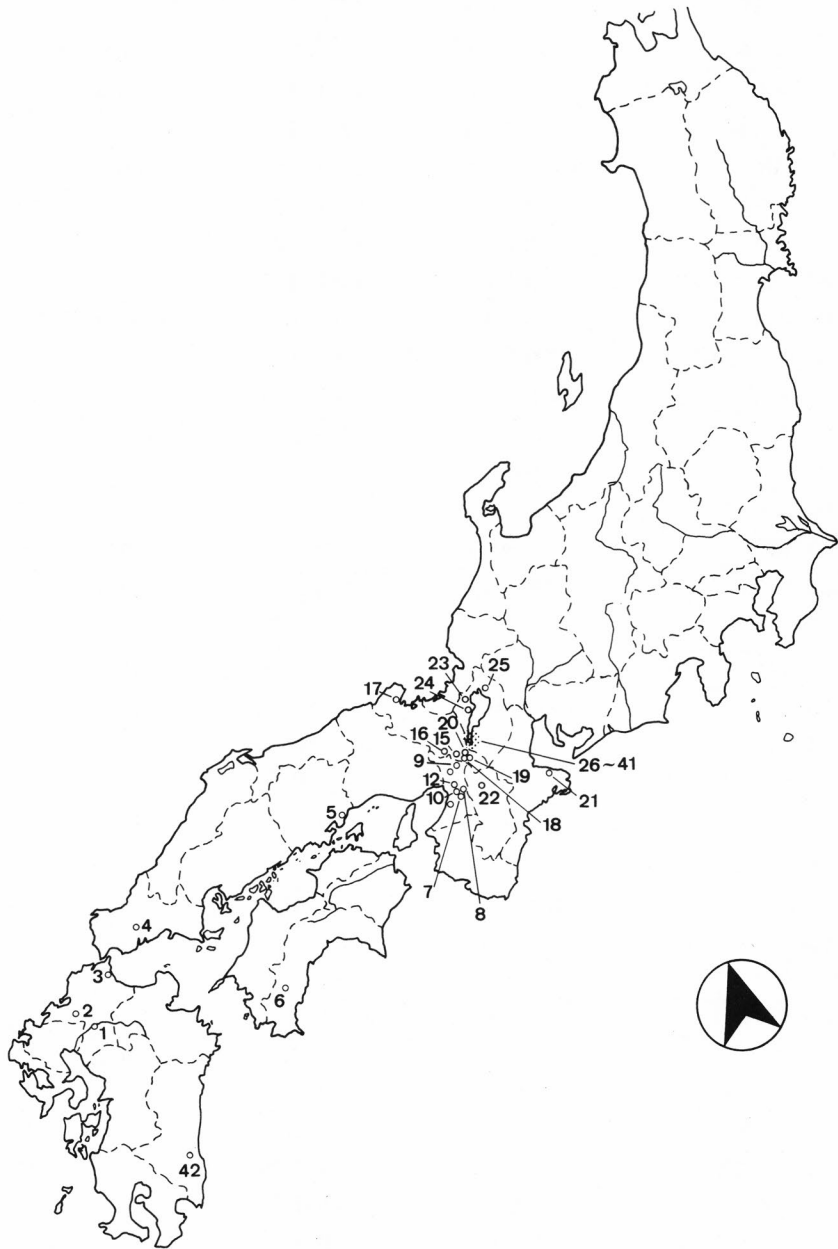
縁部は、前段階の壺L・Mの口縁部と同様に外反しているが、シャープさを失い、やや部厚くなる。篠鉢Ⅱの口縁部は丸く肥厚するが、前段階のように屈曲はせず、体部からそのまま肥厚した口縁部となる。J期は篠鉢Ⅱしか確認していない。口縁部は体部の延長部をやや肥厚させただけのものとなる。



第1図 篠窯須恵器編年図

第1表 篠原型須恵器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	報告書発行年
1	筑後国府跡	福岡県久留米市	篠鉢Ⅰ(F期)、篠鉢Ⅱ(G期)	1980
2	大宰府史跡	福岡県太宰府市	鉢D(E期)、篠鉢Ⅱ(G~J期)	注2文献
3	寺田遺跡	福岡県北九州市	篠鉢Ⅱ(H期)	1988
4	山口大学構内(吉田)遺跡	山口県山口市	篠鉢Ⅱ(J期)	1985
5	西谷遺跡	岡山県長船町	鉢D?(D期)	1985
6	後川・中筋川	高知県中村市	篠鉢Ⅱ(J期)	1989
7	丹上遺跡	大阪府南河内郡	篠鉢Ⅱ(I期)	1986
8	神並・西ノ辻鬼虎川遺跡	大阪府東大阪市	篠鉢Ⅱ(J期)	1986
9	嶋上郡衙跡他	大阪府高槻市	篠鉢Ⅱ(G期)	1989
10	大和川今池遺跡	大阪府堺市~松原市	篠鉢Ⅱ(I期)	1983
11	栄ノ池遺跡	大阪府岸和田市	篠鉢Ⅱ(I~J期)	観音寺遺跡1982所収
12	四天王寺	大阪市	篠鉢Ⅱ(I期)、篠鉢Ⅱ(H~I期)	1986
13	服部遺跡	大阪府豊中市	篠鉢	1986
14	長原遺跡	大阪市	篠鉢	1978(センター)
15	長岡京跡	京都府向日市	篠鉢Ⅱ(H期)	1987、他多数
16	観音芝廬寺	京都府亀岡市	鉢D(E期)、壺L・M(D・E期) 篠鉢Ⅰ(F期)、篠鉢Ⅱ(I期)	1988
17	中野遺跡	京都府宮津市	壺L・M(F期)	1982
18	平川廬寺	京都府城陽市	壺L・M(F期)	1975
19	正道遺跡	〃 〃	壺L・M(C期)	1973
20	大鳳寺跡	〃 宇治市	壺L・M(F期)、篠鉢Ⅱ(J期)	1987
21	斎宮跡	三重県明和町	篠鉢Ⅱ(H期)	1986
22	平城京東市	奈良県奈良市	壺L・M(H期)	1984、平城京関係多数あり
23	井ノ口中川原	滋賀県マキノ町	篠鉢Ⅱ(J期)	1983、注4a文献
24	鴨遺跡	〃 高島町	篠鉢	1985、〃
25	柏原遺跡	〃 高月町	篠鉢	1980、〃
26	大伴遺跡	滋賀県大津市	篠鉢Ⅱ(I期)	1983、注4a文献
27	川中遺跡	〃 守山市	篠鉢Ⅱ(J期)	1986、〃
28	榎木原遺跡	〃 大津市	篠鉢Ⅱ(I期)	1975、〃
29	森ノ前遺跡	〃 近江八幡市	篠鉢Ⅱ(I期)	1985、〃
30	吉地大寺遺跡	〃 中主町	篠鉢Ⅰ(F期)	1985、注4b文献
31	富波遺跡	〃 野洲町	篠鉢Ⅱ(I期)	注4b文献
32	大津宮関連(1976)、33 穴太下大門(1975)、34 延暦寺(1981)			注4a文献、篠鉢Ⅱのみ
35	近江国庁(1977)、36 花摘寺(1978)、37 赤野井(1977)			
38	瀬田廬寺(1961)、39 手原(1981)、40 下々塚、41 宮司			
42	小山尻東遺跡	宮崎県清武町	篠鉢Ⅱ(H期)	1985
43	平安京跡	京都市		多数



第2図 篠原型須恵器出土遺跡分布図

これらの特徴を基準として、各地の出土例を調べた。

3 篠原型須恵器の出土地点

筆者が調べたもののみで、出土地点一覧表を作成した。すると、九州4地点²、四国1地点、中国地方2地点、大阪8地点³、奈良1地点(平城京全体で1地点とする)、滋賀19地点⁴、京都(平安京を1地点)7地点、三重県1地点となった。山陰での出土例がないが、将来出土する可能性は大いにある。出土地点をみて気づくのは、第1に大宰府や筑後国府、近江国府などの官衙遺跡が目立つ点、第2に平川廃寺や大鳳寺跡のように寺院関係が目立つ点、第3に中野遺跡や大山崎町などのように交通の要衝地が目立つ点、第4には吉田構内遺跡や神並・西ノ辻遺跡のように中心的な集落で目立つ点である。したがって、ここで抽出した遺跡は少ないけれども、出土傾向としては、官衙・寺院を筆頭とした政治の中心地や、物質の集積地で出土していることから、中心的な集落へ運ばれたことが充分考えられ、今後いたる所で確認できるであろうことがわかる。また、時期としては9世紀の例は少なく、10世紀から11世紀初めにかけて広域に分布する。

以上のことから、篠製品は平安京造営以後、しばらくはあまり平安京以外には運搬されず、9世紀後半になって一部の官衙に運ばれ、その後、10世紀になると官衙を始め、それ以外の集落でも広く使用されたことが知られる。

筆者が実見した畿内の状況でいえば、これらの篠製品と共に、土師器皿(ての字状口縁)や緑釉陶器がしばしば共伴しており、したがって、これらの製品の移動は、平安京に於ける生活様式の一部が移動していることになる。すなわち、これらの事象は平安京からの人の移動を示していることになる。しかし、もう1つの事実、土師器皿は平安京特有のものではあるが胎土は相違しており、在地で製作された平安京模倣型であることがわかるので、結局は、その生活様式そのものを携えた人の移動と、生活様式をまねた場合とがあることになる。現状では、早い段階が前者で、10世紀後半になると後者が圧倒的に多いということに注目しておきたい。これは、平安京生活様式の点的な分布から、面的な分布を示しており、逆に言えば都市としての平安京が、他地域の求心的役割を果たし始めた過程として把握することができる。この出土地点一覧表で判明したことは、徐々に平安京が物心共に当時の求心地として機能していった事象なのである。

4 篠と陶邑窯

篠製品が各地で出土することは、平安京の生活様式の一部が他地域に浸透していく過程を示していると指摘した。つまり、篠は都市窯として機能したわけである。それでは、平

城京に供給した陶邑はどのようなのであろう。篠と陶邑との違いについては、筆者が簡単に触れたことがある⁵。それは前者が新興窯で、中世につながる特産品的な意味合いを付加した生産構造であったと推定し、後者が古墳時代以来の伝統窯で、律令体制確立期まで全国的に強い影響力をもっていたけれども、律令体制の弱体化に伴って衰退した。この原因は長期間の生産による薪や粘土の枯渇化であろうという意味のことを述べた。

しかし、これでは本質に迫っているとは言い難い。ここでは、篠と陶邑を支えた生産母体について以下のように推定してみたい⁶。

陶邑で操業が開始された後、6世紀の後期群集墳造営時に全国的に須恵器の操業が開始された。横穴式石室導入と連動したこの状況は、ヤマト政権の古墳祭祀を各地の首長や、在地豪族が受け入れた結果であり、地方支配を強めた証拠といえる。この時、須恵器はどのように伝播したのかを想定すると、全国の様子は、陶邑の器形や窯構築など一連の技術の伝播であるので、陶邑の工人の一部が移動したとも考えられるが、全国的にはほぼ軌を一にして需要が始まったと考えられるので、それでは陶邑の工人の人数が足らなくなる。したがって、蓋然性のあるのは、在地首長下の構成員が陶邑に技術を伝習に行き、それらを核として在地の操業が開始されたというものである。とすれば、陶邑と若干相違した形態の存在が理解できよう。また、伝習が1回で終らず、例年に及んだからこそ、陶邑の器形変化に対応して他地域も変化したと理解できよう。この前提は、在地首長がヤマト政権に服属した状態と、人的交流はその間で行われるので、在地首長服属下の技術者が移動するという構造である。須恵器の技術は1窯10人以上の共同作業であり、薪や粘土採取などを考えると、私的に服属した技術者が在地首長の領地で作業に従事していたと言えよう。

在地首長の権力は古墳造営廃止後は、寺院建立に結集した。ところが、律令体制となつて、人的にも領地的にも大きな制限が加えられると、権力は衰亡する。一部は郡領層となつたり、群集墳の主体者の末裔も一部が里長(郷長)などに任用されるけれども、ほとんどは勢力を削減されてしまう。古墳時代の陶邑は、ヤマト政権の権威伝達集団として成立したわけで、この陶邑はヤマト政権直属の在地首長下におかれていたであろう。それが、群集墳造営に伴って、陶邑の集団、あるいはこれを統括する在地首長の権力は増大したであろうが、律令体制となると厳しい統括下に入ってしまう。にもかかわらず、奈良時代の陶邑が活況を呈しているように見えるのは、それは律令政府の直轄地であったためである。『日本霊異記』にみえる珍努(チヌ)の郡領が行基集団に身を投じてしまうという事情は、かつての在地首長の没落を示しているのだから。さて、奈良時代に直轄地となった史実を順に書くと、霊亀二(716)年、河内国三郡を割いて和泉監を置く(続日本紀)、これは和泉郡・日根郡・大島郡の3郡で、珍努宮の管理と当該地方の支配に当たらせた。その後、740年

に再び河内国に併合されたが、757年に改めて和泉国として独立した。このように、直轄地になることによって陶邑は在地首長の服属から離れた。しかし、かつて在地首長下の服属集団であった彼らは、それ自体が自立化してはおらず、和泉国の調としてその後に須恵器を供給するが、窯業集団として勢力を得て、豪族化することはなかった。9世紀になって律令体制がやや弛緩するや、陶邑の生産量が激減することは、陶邑の構造が国家直轄体制に依存していたことを示す。また、それ以前は在地首長なり国家なり、薪や粘土採取地を領有する勢力下での操業を前提としたもので、この勢力の低下、757年以降は和泉国という地方行政の中心の権威低下に伴って、集団の力は衰亡したのである。律令政府が求めたのは製品であり、生産体制の維持については保証せず、陶邑解体後は篠やその他の窯業地に製品を求めていくのである。

奈良時代の前半の状況は、律令体制の確立期で、多くの在地首長や豪族が没落していった。ところが、聖武天皇による恭仁宮や紫香楽宮造営や大仏、国分寺、国分尼寺の造営は国家財政だけでは対応できず、墾田永年私有令にみられるように、富有者の財力をあてこんだ政策に変更した。これに伴って、また豪族が台頭してくる。その最たる者が郡司層であろう。篠の成立は、これら新興勢力によって統括された窯業集団の成立といえる。その契機は丹波国府や国分寺・国分尼寺の建設であったが、その後、長岡京で足がかりをつかみ、平安京では都市供給の主力窯として機能したことは、以前述べたことがある⁷。それは中世につながる特産品的意味での生産であった。特徴的な須恵器鉢や、小壺はその具体例である。古墳時代の陶邑も平安時代の篠も、いずれも在地豪族に統括された窯業集団であった。前者はヤマト政権の古墳祭祀による地方支配の強化の道具として使用され、その後、生活様式の部分を構成するようになっていくが、その段階で土師器とのコスト差⁸が明確になり、須恵器窯は減少していく。これに反して後者は、コスト差が明確になって以後の窯業であり、彼らが目指したのは土師器と競合する製品以外で特徴を出し、特産品的感覚で都市に供給するというものである。これは、中国陶磁や緑釉・灰釉・黒色土器も含めて、様々な製品の出現によって、様々な使い分けが生まれたという事情による。この方向性こそが、中世の商品流通社会成立に向けての道なのである。物資が律令体制の設定した国一郡一郷という地方行政ラインを中軸として移動する場合は、未だ中世の特徴をもつとは言えない。中世の開幕は、物資文化の観点で言えば、需要と供給のバランスが市場原理で動いた段階からと捉えておきたい。

5 ま と め

以前に、西弘海氏から奈良時代での須恵器と土師器の互換性が、必然的に須恵器のコス

ト高となって、これが衰退の一因となったとする考えが出されている⁹。これは一見市場原理によって決定されたかのようであるが、実は、古墳時代以来の在地首長の衰亡が原因なのである。律令体制となって、土地の分割(郷里制にみられる土地の分断化は在地首長にとって大きなダメージとなっただろう)や公民として離れた服属民たち、これらの事象によって、特に8世紀前半の律令体制確立期に在地首長は没落し、これに依存していた窯業集団は解体した。

再び窯業集団が活況を呈してくるのは、平安京の生活様式が地方に拡大してゆく中である。ここで興隆した窯業集団は、窯の縮小化や技術の省略化によって、より小規模体制を採用して生産するが、その基盤は粘土や薪の採取などの諸条件が整えられた、数少ない土地の郡領層たちであった。このような選別化が後の分業体制の起因となるが、市場が限定されたラインであった段階では、自立化はできない。その点では在地首長下の陶邑体制も郡領層による篠体制でも同じである。篠が須恵器生産をやめて瓦生産に転換したことは、篠の体制が自立化した集団で構成されなかったことを示している。但し、藤原道長の法成寺造営に端を発した、新しい流通経路の出現を見越したこの転換は、中世商業生産体制成立に向けたひとつのあり方であった。これが、12世紀まで篠の瓦生産が持続できた理由である。そして、廃絶した理由は、窯業を存続させる条件の喪失、すなわち、台頭著しい富豪層と荘園の増加による勢力の削減及び分断化が進んだ結果であるし、他地域(特に東播磨)のこの条件をクリアした集団の台頭も大きな原因なのである。

(いの・ちかとみ=当センター)

- 1 伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第37号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 2 中島恒次郎「大宰府における搬入土器」(『中近世の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会) 1990
- 3 鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器」(『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会) 1988
- 4 a 堀内明博「平安時代中・後期の畿内の土器組成(1)」(『中近世土器の基礎』日本中世土器研究会) 1986
b 森隆「近江地域出土の古代末期の土器群について」(『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会) 1988
- 5 注1に同じ。
- 6 古墳時代以降の窯業集団の動向については別稿を準備中。本稿では簡単に触れるのみとする。
- 7 伊野近富「丹波・篠窯の終焉」(『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会) 1987、注1文献
- 8 西弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986
- 9 注8に同じ。